『別科日本語教育』第6号（2004）

2003年度担任クラス内での「日本事情」実践報告
－別科における「日本事情」講座開設の必要性－

松嶋　緑

【キーワード】「日本事情」教育　別科における「日本事情」実践報告
クラス別・レベル別に応じた「日本事情」

はじめに

現在日本国内で留学生を対象に行われている「日本事情」教育は、それを如何に評価するかという議論もまだあるとはいえ、学部学科レベルでは「日本事情」という講座の開設が、文部省（当時）の大学設置基準に記されている。学部学科の予備機関である「留学生別科日本語研修課程」でも、ほとんどの大学別科で、「日本事情」の講座が開設されているようだ。例えば、麗澤大学留学生別科、東海大学別科、拓殖大学別科などがそうである。しかし、本学別科研修課程においては、 以前は「日本事情」講座を開設していたが、1999年以来、講座名としては存在するものの、実質的な「日本事情」としての授業は行われていないのが現状である。

筆者は、王(2003)の、商学部における「日本事情」の実践報告[1]にも啓発されることが多かったが、赴任以前に在籍していた予備教育機関での経験をもとに、予備教育にも日本事情教育は必要であるという考えを持っている。そのため、着任年度の2002年度に筆者が担任したⅡクラスにおいて、試行的に「日本事情」を行い、その結果を基に2003年度担任したⅢクラスにおいて、前期は不定期に、後期は１つの講座として定期的に「日本事情」を行った。本稿ではまず本学別科における日本事情開設の経緯を明らかにした上で、２００２年度の試行的実践、および２００３年度に行った実践の結果を報告したい。その上で、今後本学別科の指導カリキュラムを考える上で、レベル別、クラス別に応じた「日本事情」講座開設の必要性を主張したい。

[1] 王は所属する専修大学商学部において、韓国・中国語圏からの留学生に対する「一般日本事情」課目を行なう際、学習者のニーズは日本の習慣、伝統などにも関心を示すが、それらを学ぶ場が少ないという現状を考慮し、①基礎知識の導入②日本の習慣に関する知識の導入③専門科目を視野に入れた「日本事情」を行った。

１．　日本事情概況

１．１　簡単な歴史

豊田（1988）によると、「日本事情」とは、「日本について見られるいろいろの事というように理解される」とある。昭和３０年代にわが国の留学生受け入れが本格化しはじめて以来、４０年代にはすでに国立大学で「日本事情」講座を開設していた。また文部省（当時）が昭和３７年に交付した文部省令２１号『外国人留学生の一般教育等履修の特例について』においても「日本事情」のことが触れられている。また大学設置基準には「日本事情」という科目についての記述があり、学部ではそれに基づいて「日本事情」講座を開設しているところが多い。

１．２　内容について

「日本事情」という科目の内容はその範囲がきわめて広く、『日本事情ハンドブック』でも、次のように指摘している。

> たとえば、大まかに、「日本の文化・社会」というように規定したとしても、その中には…(略)…あらゆる学問分野に関わる学際的な領域である、･･･(略)･･･範疇が広いことと、領域設定が明確ではないために、「日本事情」について「なにを」「どのように」「だれが」教えるのかというコンセンサスが得られにくく、その専門性との関係でも議論がしにくい状況が続いている（はじめに piv)。

その結果、「日本事情」で行うべき内容と「日本語教育」の中で行うべき内容の区別が明確でなく、「日本事情」とは何か、という定義がしにくい状況が続いている。予備教育機関である別科における「日本事情」教育の位置づけについても、「日本語」の授業の延長としてとらえるべきなのか、独立した「日本事情」としてとらえるべきなのか明確にしにくい状況である。

『日本事情ハンドブック』では、日本語、日本事情の講義内容となる６章１２９項目が記されているが、参考のために、そこから各章のタイトルおよび主な内容を挙げる。

１章　コミュニケーション（身ぶり・広範囲の言語・文化）
２章　日本人の生活（住む・食べる・働く・楽しむ・夫婦として暮らす等）
３章　外国人と日本社会（日本で学ぶ・働く・生活する外国人との関連）
４章　個人と社会（社会の中の個人・日本の会社・政治・学校）
５章　社会と性差（日本人の性差観・日本文化の中の性差等）
６章　高度成長と社会の変化（高度成長の特徴、「まえ」と「あと」等）

２　　本学別科における「日本事情」について

２．１　別科でおこなわれるべき「日本事情」教育の位置づけ

学部学科における「日本事情」教育においては、その内容は前述の６点に大別されるが、ではこのうち、予備教育機関である別科の日本事情を考えた場合、何に重点を置くべきなのだろうか。特に、本学別科生と学部生とを比べた場合、以下の違いは明確に考慮に入れなければならない。まず、日本語能力（レベル）が絶対的に異なる。本学別科

の学習期間は１年間（実質総授業時数約８００時間）であり、授業時間数に制約がある。別科募集要項には、応募資格者は「ある程度の日本語力を有するもの」と記されているが、現状では、別科に入ってくる学生の大半は、初級レベルの学生である。つまり、時間的な制約のある中で、初級レベルの学生を、学部の授業に最低ついていくだけのレベルにまで上げなければならない。それでも、初級終了～中級前半レベルで、一般留学生とのレベル差は否めないのが現状だ。次に、初来日者がほとんどの別科では、日本での生活も初めてであり、学習期間も短いため、特別に指導をしない場合、学部入学後、学部生と一緒に授業を受けていく上でのハンディがより多くなってしまう。これに対して学部生は、学生の母国から「日本留学試験」を受けて直接来日する学生も出てきてはいるが、一般的には予備教育機関である「日本語学校」で、就学生として２年勉強してから学部に入学する者が大半である。筆者が以前、民間の日本語学校で指導した経験から、一般の日本語学校では、ごく一部を除き[2]、「日本事情」の正規講座は設けていないものの、日本で暮らしていくための最低の知識や情報をある程度は教えている場合が多い（その程度があいまいで統一した基準がなく、あっても各校がまちまちなため、学部生への「日本事情」教育が不可欠なのであるが）。そういった指導が別科で全くない別科修了生が、他の留学生と一緒に学部で授業を受けていかねばならないのだから、既存知識・情報のハンディをもつことになってしまう。これは場合によっては、別科修了生に、学部入学後の学習意欲の低下も引き起こす遠因となるのではないか。

上述した違いを基に、筆者は、本学別科における「日本事情」教育の位置づけを以下のように考える。

毎年入ってくる別科生のレベルがまちまちなので、日本語はもとより、「日本事情」教育をする上でも、クラス・レベルごとに指導を分ける必要性がある。例えば最も低いレベルのクラスには、やはり視覚や聴覚も利用した「理解項目を知識としてインプットすることを中心とした」授業が必要であろう。またレベルが上のクラスに対しては、既に理解している日本語を用いて「日本事情」的な要素を組み込んだ授業を展開させることが可能であろうし、日本語の授業である「会話」や「聴解」・「読解」と「日本事情」とを組み合わせて、日本と学習者の出身国の文化比較や異文化間コミュニケーションを話題として取り上げることも可能だろう。

しかし、どのレベルでも、日本で暮らしていく上で知らなければならないこと、例えば、学習者が在住している地域と結びついた特有の名称（地名など）や、年賀状・見舞い状の書き方、年中行事への理解などは、共通にインプットしておく必要がある。

最後に、上述した部分とやや重複するが、「日本事情」は、日本語の授業の中に組み込んで行うこともよくあることで、例えば「読解」をしながら、その内容を関連づけさせた日本の事情を教えること、「会話」や「聴解」で、「日本事情」と関連づけた指導をすることもともに可能だ。また、サバイバル的な生活知識や文化習慣の違いに関する知

---

[2] 最近、新宿日本語学校、拓殖大学日本語学校など一部の日本語学校で、大学院・大学受験希望者で、12年の学歴条件が不足している学生向けに補うコースが設置されているが、そこでも「日本事情」を講座に組み入れている。

識の一部については、別科生の保証人・知人などが、学生の母語で補ったほうがいいという考えもある[3]。しかし、それらはまさしく「一部」であって、「日本事情」の内容すべてを補えることはできないだろう。専門の教員が、知識として、日本語によって補わなければならない内容も多いのではないか。

以上の点にかんがみ、筆者は本学別科で「日本事情」を行う際、その内容を次の三つに大別してみた。

① 入門初級者向けの、「理解すること」に重点をおく知識
日本で暮らしていく上で最低必要な、いわゆるサバイバル的な知識を理解させることから、日本で生活してくことと関連させた情報まで。ここには前述した、学習者が在住している地域と結びついた特有の名称の学習なども含まれる。

② 今後日本の高等教育機関で学ぶ上で、最小限有していなければならない知識
これは、学部で学んでいく上で、最低必要な地理・歴史・一般常識に関する知識を指す。学習者のレベルと段階にもよるので、①と重複する部分も含まれるが、生活していくのに必要な知識レベルから、学部学科で専門科目を学ぶ際、日本人学生が既に有している一般常識レベルの知識まで、幅広く対応して教育する必要がある。地理・歴史的なこと・社会事情・文化習慣に関連した項目などが含まれる。

③ 異文化理解教育と関連させたコミュニケーション
日本の社会・生活・文化についてある程度理解した上で、自国の社会・生活・文化との比較、さらにその上で学習者が日本人とどうコミュニケーションしていくべきかを考えるもの。中級・中上級レベル向けで、学部における「日本事情」教育に近い。

２．２ 本学別科における「日本事情」科目の経緯について

本学別科研修課程は、１９７８（昭和５３年）に板橋校舎に開設された。２年目より本学別科に着任し、現在別科長である大蔵親志教授の話では、本学別科でも、開設以来、「日本事情」という講座は、２クラス体制だった当時の上のクラスを対象に、設置されていた。内容は、当時市販されていた日本事情関連の教材を用いた授業を行っていた。教材は、その時の担当者によってまちまちだった、ということである。

１９９７（平成９）年、別科が板橋校舎から現在の東松山校舎に移り、現行の専門嘱託専任講師（以下「嘱託」と略称する）制度になってからは、２クラス制、または３クラス制の上レベルのクラスを対象に、嘱託が同講座を担当した（３クラス制になった平成１０年度は、合同授業の形をとった)。しかし、平成１１年度より、以下の理由で別科から実質的な「日本事情」は行われなくなった。

理由１：別科日本語課程の講義総時間が１年、実質的には約８００時間しかないという

[3] 本学別科では、日本人以外に、本学別科修了生・学部学科卒業生・大学院修了生も含めた外国籍保有者が保証人になっていることがある。

物理的な制約の中で、日本事情に割り当てられている時間を他の学習項目に振り分けるべきだ、という意見が出たため。

理由２：ビギナー・レベルの学生の場合、来日直後は、日本語を聞くこともできないため、いわゆるサバイバル的な知識は、別科の授業の中で時間を割くよりも、学生の母語を話せる保証人や別科修了生の先輩から学生の母語で補うほうが効果的ではないか、という意見が出たため。

理由３：担当教員の意識があれば、特に「日本事情」という独立した授業を行わなくても、日本語の授業内で、「日本事情」的なことを補うことが可能ではないか、という意見が出たため。

以上の考え方により、別科全体としては、平成１１年度以降この体制が続いている。

３．　２００２年・２００３年度の実践報告

２００２年度に筆者が着任し、半年間、クラスの学生との話し合いや、学生の様子を見た上で考えた結果、筆者としては、その年担任をしたⅡクラス（初級レベル）の学生に対しても、知っておくべき最低の知識を教える授業としての「日本事情」を行う必要性を痛感した。それで、その年後期の担当時間内に、日本語の授業とは独立させて「日本事情」を行った。また、その結果を基に、翌２００３年度も、担任をしたⅢクラスで「日本事情」を行った。以下は、それぞれの講義の紹介である。なお、稿末に資料として、具体的な授業記録・使用教材・参考資料を添付した。詳細は稿末を参照されたい。

３．１　２００２年度Ⅱクラスでの実践報告：予備実践として

２００２年度Ⅱクラスにおいて、後期の筆者の担当時間に、不定期に５回、「日本事情」を行った（詳細は稿末資料 p. 39 を参照のこと）。

３．２　２００３年度Ⅲクラスでの実践報告

２００３年度Ⅲクラスにおいて、前期は不定期に日本語の授業（主教材である「みんなの日本語Ⅱ」を使う授業）内で３回行った。それに対して、後期は、「日本事情」のクラスとして独立させ、９回行った[4]。

３．２．１　日本語の授業の中で応用させた実践例

２００３年度前期は、「みんなの日本語」を使った日本語の授業内ではあったが、応用させて行った。「日本事情」であることを意識し、60～90分独立した時間を確保して行った。

「順番・手順の表現」（教科書 43 課）　＜p. 33 の①内容①に含まれる＞

・電話のかけかた（「みんなの日本語書いて覚える文型練習帳Ⅱ」第 43 課）

---

[4] 後期の総授業時数は実質 12 回だったが、筆者が他に担当した「作文」の時間との関係で、３時間を臨時に作文指導の時間としたので、計９時間になった。

・コピー操作(同第43課会話)
・銀行ＡＴＭの手順(「みんなの日本語Ｉ」第16課会話)
・ゴミの捨て方（東京都23区と埼玉県東松山市の場合・自地域との比較）

Ⅲクラスでは、『みんなの日本語Ｉ』第20～25課の復習から授業を始めたので、学生たちは、教科書第19課までの内容は、触れていなかった。ここでは「まず／はじめに」「次に」「それから」といった順番・手順を表す接続詞のみを教えるだけでなく、順番・手順の表現が必要な実際の場面（日本の公衆電話をかける場面や、コンビニなどにあるコピー機を使う場面など）を設定して臨場感を出し、電話のかけ方やコピーのとり方などを擬似体験しながら学習した。また、関連表現として、ゴミの捨てかたも授業内容に入れた。

「受身形」（同第37課受け身形）＜ｐ.33の内容②に含まれる＞
新日本語の基礎「クラス活動集Ⅱ」
「みんなの日本語書いて覚える文型練習張Ⅱ」から一部抜粋し教材を作成
＜日本語の授業の応用＞
・外国の地名学習および外国で生産されて輸入されている食べ物の名称（原材料・食品名）→ 「～は・・・で作られます」「～は・・・から輸入されています」など。
＜日本事情＞
・日本では食物の原材料のほとんどを外国からの輸入に頼っていることを認識させる（学習者の国とも取引している場合もあることを理解させる）
・外国の国名表記、日本および学習者の国・地域からの位置を確認
・グラフの読み方（縦軸・横軸に何が入るか、名称・単位の表現）
問題提示例：以下の食品は主にどこから輸入されていますか

学生たちに作業として、国名の表記、輸入先の国名及びその表記の確認を済ませてから、「～で、一番／最も・・・な国はどこですか」とか「大豆の輸入量はどこからが多いか」など、比較的自由に質問を作らせて、別の学生に答えさせるという（受身表現以外の既習項目の）表現練習も行った。

「地理」 ＜ｐ.33の内容①に含まれる＞
プリント教材を配布し、地形・都道府県・地方区分などの基本事項を理解させたあと、学習者が在住している地域である埼玉・東京地区の地名、東武東上線の駅名（大学／学生の最寄り駅名）の読み方などを教えた。
問題提示例：「東松山」・「森林公園」・「東武練馬」の読み方を言ってください

「社会」 ＜ｐ.33の内容②に含まれる＞
日本の冠婚葬祭について：慶弔に伴う祝儀・不祝儀の習慣に関する知識や慶弔用ののし袋の書き方、自国の各地域[5]との比較など

住宅事情、経済事情などをトピックとして、各自の出身地域の文化・習慣の比較を話し合わせた。
問題提示例：あなたの地方では、例えば結婚式などおめでたいときにお金を包む習慣がありますか。いくらぐらいつつみますか。

「食事マナーの比較」 ＜p.33の内容③に含まれる＞
『改訂版　話そう考えよう　初級日本事情』第1部8から一部抜粋編集して使用。
いろいろなマナーの絵を見せて、学習者の地方の習慣とを比較して発言させ、それについて話し合いをさせた。
問題提示例：以下の絵で、あなたの国・地方の、食事のときのマナーと比べ、いいと思うものには○、それ以外の項目には、×をつけてください。
⇒　みんなの発表を個別に聞きながら、メモをとり、学生と一緒に日本ではどうか、どうしてかなど「違い」を考えた。

3．2．2　独立した授業内で行った実践例

「地理・社会・生活情報」＜p.33の内容①に含まれる＞
プリント配布や、プリントをもととした学習のあと、話し合い（出身地域との比較）をさせた。
「研修旅行前のオリエンテーション」＜p.33の内容②に含まれる＞
2003年度は、全クラス合同で、日程についての最低の理解（研修旅行で訪れる予定の場所・気候の予備知識）、集合場所についてなどの確認を行った。
「入学後の学部学科ガイダンスの補足」＜p.33の内容②に含まれる＞
学生の進路予定先の学部・学科がその年度始めに行った入学ガイダンスで配布された小冊子から、最低限必要な項目にしぼって再編集したプリントを作成・配布し、履修登録や奨学金などをわかりやすく説明した。

3．3．1　学生の授業評価アンケートの結果と考察

調査「クラスへの全体評価」について
２年度とも、各年度授業最終日に、筆者が学生に「クラスへの全体評価」というアンケート用紙を作成し配布、時間内に回収した。同アンケートの目的は、自分の担任するクラスに対する年間評価が第一であったが、特に初級終了後に使用した教材に対する評価、および試みに行った「日本事情」をどう評価しているかを把握することでもあった。2002年度の場合、在籍８名中、７名から回収することができた。また2003年度は在籍７名全員から回収することができた。

---

[5] 今年度Ⅲクラスの在籍学生はすべて中国籍で、６月の時点では、上海市と福建省、吉林省出身者だった。

3．3．2　評価質問用紙について

質問文は、2002年度は、大きなテーマについては日本語および英語・中国語で訳をつけ、記述式で回答するようにした。また、選択肢は日本語のみで、記号で選ばせた。記述による回答欄には、使用言語を日本語・英語・中国語の中から選択使用可とした。

以下に各授業評価の結果を記した。なお、2003年度は、質問は全て日本語で質問し、記述式で回答する箇所に関しては、母語・日本語での回答可能とした。また、結果は、本稿に関連した箇所のみを抜粋した。詳細は、稿末の資料を参照のこと。

1）授業についての感想（２００２年度）Ⅱクラス　在籍８名回収７名

2．科目について＜About Subjects Classes ／关于每个科目＞：

①授業で勉強してよかった科目はどれですか。あれば○をして下さい。いくつ○をしてもいいです。

科　目	人数
a．精読（テーマ別中級から学ぶ日本語）	2
b．速読（トピック25）	2
c．速読の日本語（スキャニング）	2
d．漢字	1
e．日本事情	4
f．パソコン作文	2
g．その他	0

e．日本事情

あ：日本の基礎事情　（地理・人口など）　4

い：研修旅行　4

う：年末年始（年末年始の行事・年賀状の書き方）　4

え：学部入学後の知識（ガイダンス補・奨学金他）　4

2）授業についての感想（２００３年度）Ⅲクラス　在籍７名回収７名

2．①授業で勉強してよかった科目はどれですか。あれば○をして下さい。いくつ○をしてもいいです。

科　目	人数
a．精読（ニューアプローチ中級）	5
b．同上　補い（聴解・速読）	3
b．速読（トピック25）	4
c．速読（スキャニング・スキミング）	3
d．作文	3
e．日本事情	7
f．パソコン作文	2

e．日本事情

あ：日本で生活していく上での基礎知識	4
い：マナーに関する文化比較	4
う：研修旅行	5
え：地理・気候・人口など	3
お：社会・文化・教育などの諸事情	4
か：各種はがき・手紙の書き方	5
き：日本の年末年始について	4
く：学部入学後ガイダンス補助	5

重複回答をしている中でも、2002年度は、「日本事情」へ7名中半分以上の4名が「よかった」と回答しており、回答数でも一番多い。2003年度でも、「よかった」と評価された科目の中で、最も高い数字を示した。また、各内容については、上位を占めた（5名）のが、2002年度は、研修旅行・各種はがき・手紙の書き方、および学部入学後のガイダンス補助（履修登録・奨学金案内も含む）だった。その次に多かったのが、日本の基礎的な知識や諸事情、異文化比較・異文化理解的なもの（マナーの比較など）だった。一方、数字上では、地理・地形的なことへの評価は3名と最も低いが、Ⅲクラスの学生総数が7名であることから、半数近くの学生が、興味をもって受講していたと判断できるのではないか。

なお、授業内でも、学生にその日やったことに対しての感想を不定期に聞いたが、その一部を以下に挙げる。:「マナーの文化比較はためになった」「年賀状の書き方は役にたった」「学部ガイダンスは学部に進学してからのことが少しわかった」「日本の社会、特に社会状況などに興味があるのでおもしろく聞いている」等々。これらは個別の学生の意見であるが、以上のコメントからも、学生は「日本事情」を肯定的に評価していることがうかがえる。

以上述べたアンケートや結果の考察から、筆者は「日本事情」を改めて行う必要性を感じた。

3．4 反省・問題点

前述の結果分析から、「日本事情」に対する学生からの評価は、おおむね肯定的であることがわかり、日本事情の必要性を感じたが、反省点・問題点も少なくない。以下にまとめる。

① 学生に具体的な「日本事情」の何を学びたいか、というニーズ調査をきちんとした形で行わずに、教師主体で内容を編成してしまった。

学生へは、事前に口頭で、日本事情をやろうと思うがどうかという形で打診したが、学生の立場上、教師側の提案に対し、あからさまに批判することはできなかったかもしれない。今後は、入学時の段階で、学生に対する明確なニーズ調査を行った上で内容を選定・決定していかねばならない。

② Ⅲクラスレベルの学生に対しても、ほとんど一方的なインプット中心の授業に終

わってしまった。
いわゆる学生の出身地域との状況比較・文化比較は、随時行うように意識・配慮はしたが、時間的な制約もあり、資料を読んで出身地域の様子を比較する程度にとどまった。生産的な「話し合い」までにはいたることがなかった。
③ 事後の調査も、Ⅲクラス全体の中での評価というあいまいな形でしか反映させられなかった。
今後は、「日本事情」科目に特定した評価という明確な形で行わねばならない。

おわりに

以上、担任クラスで行った実践と学生の評価分析を通じて、本学別科における「日本事情」の、必修科目としての必要性を述べてきた。別科の年間授業時間数上、絶対的な物理的制限があることは十分認識しながらも、筆者は今後、レベル別・クラス別に応じた「日本事情」を行うことを、別科全体で検討することを切望する。

参考文献

水谷修・佐々木瑞枝・細川英雄・池田祐編（1995）『日本事情バンドブック』大修館書店刊
細川英雄（1995）「教育方法論としての「日本事情」」『日本語教育』第８７号(pp. 103-113)
福岡日本語センター「日本侍事情」プロジェクト（2000）『改訂版　話そう考えよう　初級日本事情』スリーエーネットワーク刊
王伸子（2003）「中国語圏・韓国語圏からの留学生に対する「一般日本事情」課目プログラム」(2003年11月第６回香港国際日本研究・日本語教育シンポジウム　口頭発表)

資　料

資料１　　授業記録
＜２００２年度の記録＞　　対象：Ⅱクラス
期間：後期 2002年９月～2003年１月　　全５回
時間：90分または60分

2002年度の授業内容

期日	内　容	詳　　細
9/27	１．日本の地理・気候①	日本の地理 大陸・洋（海）
10/11	同　②	人口・都市・人口百万都市・都道府県など
	２．研修旅行について：	訪問予定地の情報
12/19	３．日本の年末・年始について（年末～正月についての年中行事）	
	４．年賀状の書き方	
1/ 9	５．学部に進学してから①	学部ガイダンスの補い
1/10	同　②	履修登録・奨学金について

＜２００３年度の記録＞　　対象：Ⅲクラス
期間：前期　２００３年　　５月～６月　　３回
　　後期　２００３年１０月～２００４年１月　９回　　全１２回
時間：９０分（ただし６０分になった場合もある。）

2003年度の授業内容

＊前期

期日	学習項目	具体的な内容
5/28	１．順番・順序の表現	コピー機の操作手順・銀行ATMの操作手順 ゴミの出し方について
6/ 7	２．食品の輸入状況	食品名・外国名 グラフ・統計表の読み方
6/14	３．食事マナーの比較	食事マナーについて自地方との比較

＊後期

期日	学習項目	具体的な内容
10/ 9	日本の地理・気候①	日本の国土位置について（東アジア地域・国名・海名など）・地形・気候・四季
10/30	日本の地理・気候②	都道府県名・地方区分・主要都市名・人口
11/13	社会①	衣類・食物
11/20	社会②	住宅・人口と出生率・ライフサイクル
11/27	社会③	日本人の一日・余暇活動・教育制度
12/ 4	社会④・その他①	労働と賃金（日本の労働他について） はがきについて（種類、年賀状の書き方）
12/11	その他②	各種あいさつ状について 日本の年末年始の年中行事について
1/ 8	学部進学の前に①	学部ガイダンスの詳しい説明
1/15	学部進学の前に②	（各学部学科共通項目中心） 履修登録・奨学金について

このほかに、別科全体の行事として、６月に茶道体験学習を行った。

資料2　使用した教材および参考資料

・スリーエーネットワーク『改訂版　話そう考えよう　初級日本事情』福岡日本語センター「日本侍事情」プロジェクト
・凡人社『日本の地理と社会』日本事情テキスト
・日本語教育学会『日本の地理』日本事情シリーズ
・アルク『らくらく日本語ライティング』第5～9課（pp. 32～61）
・専門教育出版『日本語作文Ⅰ』（pp. 104～105）
・日本出版貿易『写真パネルバンク』Ⅳ. 行事シリーズ
・スリーエーネットワーク『続クラス活動集　131』新日本語の基礎Ⅱ準拠
　第37-5 えびはどこから？（pp. 126～128）を一部アレンジして使用。
・スリーエーネットワーク『みんなの日本語初級Ⅱ書いて覚える文型練習帳』
　第34課 まず・次に・それから（pp. 59）
　第37課 ～られています（pp. 86）から　一部アレンジして使用

・大東文化大学平成14年度学部ガイダンスのしおり（経済・経営学部・外国語学部日本語学科用）一部抜粋編集して使用
・大東文化大学平成15年度学部ガイダンスのしおり（経済・経営・環境創造学部用）一部抜粋編集して使用
・教師用参考統計資料：自由国民社『数字で読む日本人』

上記から必要箇所を使用（必要部な箇所は一部手を加えて使用した）。

資料３　調査用紙（必要関連部分のみ掲載）

Ⅱクラス授業についての感想（2002年度）（日本語・ENGLISHI・中文でどうぞ）名前：

２．科目について＜About Subject Classes:关于每个科目＞（非漢字圏学生へは漢字にルビをふった）

①授業で勉強してよかった科目はどれですか。あれば書いて下さい（○をしてください）。

ａ．テーマ別中級から学ぶ日本語
ｂ．速読トピック25
ｃ．スキャニング（月曜日２限）
ｄ．漢字
ｅ．日本事情（あ：日本の基礎 い：研修旅行 う：年末年始について え：学部に入ってから）
ｆ．その他（具体的な科目名・よかったことを具体的に書いてください）：

②今後授業で改善したほうがいい点をかいて下さい。

Ⅲクラス授業についての感想（2003年度）　（日本語・ENGLISHI・中文でどうぞ）名前：

２．各科目について

①授業で勉強してよかった科目はどれですか。あれば○をして下さい。いくつ○をしてもいいです。

（　　）ニューアプローチ中級日本語基礎編
（　　）ニューアプローチ中級日本語基礎編補（速読・聴解）
（　　）速読トピック25（前期の月曜日・後半～後期初めの読み物）
（　　）スキャニング（月曜日・土曜日２限）
（　　）作文

・日本事情（あ：日本で生活していく上での基礎知識 い：マナー文化比較 う：研修旅行
え：地理・気候・人口など お：社会・文化・教育などの諸事情 か：各種はがき・
手紙の書き方 き：日本の年末年始について く：学部入学後ガイダンス補助 ）
記号に○をしてください。
（　　）パソコン作文
・その他（具体的な科目名・よかったことを具体的に書いてください）：

②今後、授業で改善したほうがいい点をかいて下さい。